だと今でさえ忙しい救急医療が立ち行かなくなってしまいます。そこで緊急時の調整役として訪問看護師の果たす役割が重要というわけです。

最後に高齢者医療費を下げる特効薬についてお話をされました。それはずばり高齢者の定義を変えること、つまり65歳を75歳に変えてしまうことだそうです。日本の高齢者、65歳の人はまだまだ元気であり、そういう人たちが働ける限り働ける仕組みをつくっていかなければいけません。ここで高齢者が労働を継続できる条件として慶応大学の清家篤先生の分析を紹介されました。1つ目が専門的技能を持っているということ、これは医師とか弁護士とかというだけでなく、たとえば営業のプロであるとか接客のプロであるということも含めてです。2つ目が職住近接であること。3つ目として健康であるということを挙げています。これは高血圧とか高脂血症があったとしても、働くことができる程度には健康管理ができていればいいわけです。

予定時間が過ぎても先生の講演は続きましたが、まったく時間の長さを感じさせない実に有意義な講演会でした。松田先生の益々のご活躍をご祈念申し上げます。

北見医師会

『北見医療人の学術集会』開催される

北見医師会理事
北海道医報通信員　小野寺　栄　司

北見医療人の学術レベルの向上と多職種の連携を目的とした北見医師会主催の集会が平成20年3月8日に市内のホテルで開催されました。本集会は平成19年の北見医師会定時総会において古屋北見医師会会長の強い意向で開催が決定され、医科ばかりでなく歯科、薬科、獣医、看護、工学など医療関係の多職種57名の参加を得て開催されました。

集会は多分野の医療関連職種から応募のあった一般演題10題、シンポジウム；『地域におけるIRBの活性化』と特別講演『医の倫理』(日本赤十字北海道看護大学学長;石井トク先生）の3部構成で行われました。

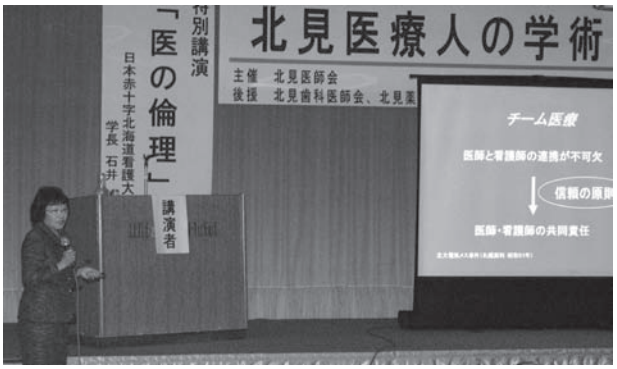
一般演題は、医科関係4題（tube retractorによる脊椎手術の報告、脳内微小出血の危険因子について、精嚢炎と尿道炎について、検査技師による下肢静脈瘤術前エコー検査について)、歯科関係4題（歯牙の漂白、歯科矯正、ビスフォスフォネートによる顎骨壊死、ネパール歯科医療協力の経験）の発表が行われました。獣医学関係では1958年以来国内での感染・発症がみられていなかった狂犬病について、フィリピンでの感染・帰国後の発症が2例続けて発生した状況と、その予防対策に関する管内の状況と今後の行政の対応についての報告がなされました。工学関係では『表在性血管の近赤外線断層イメージング』と題した北見工大からの最新の研究成果の発表が行われました。これら広い分野の発表を通じて医療の最前線で地域住民の健康を預かる『かかりつけ医』としての幅広い最新の知識を得ることができたように感じます。

シンポジウムは日本赤十字北海道看護大学教授の佐久間まこと先生を座長に、北見医師会のIRBについて（古屋聖兒北見医師会会長、原口正史高栄調剤薬局薬局長)、北見赤十字病院のIRBについて（久保道男北見赤十字病院薬剤部長、芳賀和敏北見工大共通講座准教授）の発表が行われた後、当面の倫理的・経済的問題、運営に当たっての課題などにつき活発に討論が行われました。

最後に石井トク学長による『医の倫理』と題した特別講演が行われ、医療者に必要とされる条件として個

人倫理、社会倫理、職業倫理を備えていることが求められ、現代のチーム医療の実践においては各職種の間の連携・信頼関係の構築が重要となってくるとのお話を伺いました。またIC（Informed Consent)、プライバシーなどの概念について、その成り立ちの歴史的背景について解説いただき、機関内倫理審査委員会、IRBのあり方についてのご高説を伺うことができました。そして医療が国民からの信頼を勝ち得るための医療者のあり方、中でも臨床疫学研究のあり方について科学的合理性と倫理的妥当性が重要であるとのお話しを伺いました。

北見医師会として初めての試みとなった今回の学術集会を通じて、多くの職種により医療が成り立ち、各職種間の連携が良質な医療提供のキーポイントであることを参加者一同再確認したものと確信します。地域の医療をリードしてゆくべき医師会として、今後さらに内容を充実させ継続してゆくべきものと意を新たにしました。



上川郡中央医師会

勤務医部会開催

上川郡中央医師会
北海道医報通信員　水　野　清　司

上川郡中央医師会は3月8日旭川市内で平成19年度の勤務医部会を開催した。

上川郡中央医師会は昭和62年に勤務医の組織強化のため副会長を2人制とし、内1名は勤務医で昭和62年に勤務医部会を設立している。

開業医と勤務医の数はほぼ半数で総会、研修会等すべての会合が相互の交流の場となり、連携を密にして日常の医師会活動を行なっている。

当日は椎名会長、木下副会長と大方の勤務医が出席され、木下勤務医部会担当副会長の進行ではじまり平成19年度の北海道医師会、全国医師会勤務医部会の近況と地域医療を支えている勤務医師の熱意を冷ますことのないよう労働環境改善が必要であると現場の意見を述べられた。

椎名会長からは医療費抑制策が矢継ぎ早にだされ、医療機関はその対応に追われている時、勤務医とも意見交換を深めて会員相互の連携を円滑にして地域医療の効率を図ることなどの熱心な議論も出て和気あいあいのうちに終了した。

◆お詫びと訂正◆

第1075号の本誌26頁、「転載」の中に下記のとおり誤植がございましたので、謹んでお詫び申し上げ訂正いたします。

記

執筆者氏名

（誤）井　川　和　夫　（正）川　井　和　夫